



海外・現場
最前線からの
便り



✈️ ラオスとはどんな国が、
ラオスでの生活

ラオス人民民主共和国（以下、ラオス）
はインドシナ半島中央部に位置する内陸
国で、タイ、ミャンマー、中国、ベトナム

ラオス

Simply Beautiful 緑豊かな土地を

目指す国での開発支援

独立行政法人国際協力機構（JICA）ラオス事務所 職員

古川 洸太郎



ム、カンボジアの5か国と国境を接し、東
南アジア諸国の中でも開発が遅れた国とさ
れています。しかし2021年12月に中国
昆明からラオス首都ビエンチャンを結ぶ高
速鉄道が開通し、物流、観光にも大きな影
響を与えるなど、近年の発展は目覚まし
く、2026年に後発開発途上国（Least
Developed Country：LDC）のステータ
スから卒業することが予定されています。
また、ラオスは水資源、森林資源が豊かな
国であり、国の南北を縦断するメコン川や
その支流沿いに建設されたダムを生かした
水力発電所で発電される電力を中心に、発
電に占める再生可能エネルギーの割合は約
8割とされているほか、山岳地帯を生かし
た多種多様なグリーンツーリズムにもラオ
ス政府は力を入れています。そのような開
発が進む国ですが、ラオス人は皆のんびり
とした性格をしており、夕方になると首都
ビエンチャンでもメコン川へ沈む夕陽を川
沿いで多くの人が眺め、ゆったりとした時



ビエンチャンの高速鉄道駅





メコン川に沈む夕陽

間が流れます。ラオス人の主食はコメですが、その種類はもち米と珍しく、ビールもち米を一部原料として作られています。週末になると街中ではテーブルが設置され、多くの人が「キンビヤ（ラオス語でキン・飲む、ビヤ・ビール、ビールを飲むという飲み会）を楽しんでいます。また、国民の約75%が仏教徒で、朝早くに托鉢のため街中を回るお坊さんたちの光景が首都ビエンチャンでも見られます。なお、2025年はラオスと日本の外交関係樹立70周年及びJICA協力隊派遣60周年という節目の年で、両国において様々なイベントが予定されています。

業務概要

私はJICAラオス事務所の職員として、農業・森林・環境セクターを担当しております。JICA在外事務所職員の仕事は当該国における協力事業の立案、そのための先方政府、現地企業、他ドナーとの意見交換や情報収集、実施中のプロジェクトの進捗管理、ラオスから日本への研修生の送り出し等と多岐にわたります。



地方農林事務所職員へのドローン研修

✈️ ラオスの森林

水力発電、鉱山開発、農地拡大などの産業開発による土地利用変化によって1960年代には70%あった森林率は、2000年代には約40%まで低下し、多くが少数民族で構成される山村集落に大きな

影響を与えたとされています。ラオス政府は2030年までに森林率を70%まで回復させることを目標に取り組んでおり、現在は約60%まで回復したと報告されています。



国立公園周辺地域における無許可での農地化



再投資事業対象地である国立公園

す。JICAによる技術協力プロジェクト「効果的なREDD+資金活用に向けた持続的森林管理能力強化プロジェクト（E-REDD2）」では、政府の政策・法規制の整備支援に加え、REDD+の準備と実施から、温室効果ガスの排出抑制・削減に伴う成果支払い獲得と再投資関連活動まで広くサポートしています。現在、緑の気候基金（GCF）のREDD+成果支払いとして最大約45億米ドル（約67億円）を獲得するため、ラオス政府とJICAの関係者がともに協力し、GCF事務局への申請の手続き等を進めています。成果支払いによる再投資で実施されるプロジェクトには、森林保全地域の保護、その周辺地域における住民の生計向上なども含まれています。

様々な変化に直面しているこの国で、自然資源豊かなラオスらしさを残しつつ、今後も協力していきたいと思っています。



ラオスの田園風景

※REDD+：持続可能な森林経営や適切な森林保全を通じて途上国における森林の減少や劣化を抑制し、温室効果ガスの排出削減や吸収増加を促進させる気候変動緩和策。排出削減等の成果に対して資金等の経済的インセンティブを付与することとして、国際的な資金枠組による成果支払い等が行われている。